

令和6年度 学校経営計画報告書

八王子市立高嶺小学校
校長 松久保 雅和

学校教育目標 ○た たすけ合う、思いやりのある子（思いやり） か 考えを深め、自分から学ぶ子（知恵） ね ねばり強く、最後までやり抜く子（勇気） ○は本年度重点目標 ～子どもファーストで判断し、教員一人一人が生き生きと楽しく教育活動を行うことにより、児童が生き生きと主体的に学ぶ学校～				
基 本 方 針	中 期 目 標	今 年 度 の 重 点 目 標	具 体 的 な 方 策	成 果 の 検 証
安心して生活でき、一人一人が居場所のある学校	生活指導を充実させる。	いじめを許さない学級経営を行う。 規範意識を高める。傍観者的態度を取らせない。	トラブルはその日のうちに解決し、関係保護者と共有する。 毎週全教職員でいじめ対策委員会を行い、早期発見早期解決に努める。	今年度は大きなトラブルはなく、いじめと認定した件数は14件にとどまった。その後の継続的な見守りにより、ほぼ解消している。その大きな要因として、児童が納得する指導が徹底されたことが挙げられる。トラブルは発生するが、なぜトラブルになったのか、関係児童が納得するまで話し合った。また、その経緯を当日のうちに保護者に伝え、ともに子供たちを支える体制づくりをしたこと、いじめ対策委員会及び生活指導夕会において全教職員で共有し、見守る環境づくりをしたことも大きい。今後もこの流れを継承し、検証する。
	人権教育を充実させる。	自分の人権も他者の人権も守れる児童を育てる。 自他の命を大切にする児童を育てる。	「みんなちがってみんないい」を合言葉に人権教育をすべての教育活動を通して実践し、人権意識を高める。	保護者アンケートでは90％人権尊重の意識が身に付いていると回答した。本校の児童は道徳的実践力が高い。その理由として道徳の授業でどの学級も考えるに足る発問や議論に値する発問を投げかけている。その上で考える場面や議論する場面では多角的、多面的なとらえ方を正直に出させ、どうしていけばよいかを自分で判断させている。このことを日々の学校生活で問い返す指導により道徳的実践力を高めている。また、自他理解教育を今年度より第4学年で行っている。この授業も児童が自他を大切にしようとする人権意識の高まりにつながっている。
	教育相談を充実させる。	児童の心に寄り添う。児童の声を聴く。児童が教員から見守られていると実感できるようにする。	巡回相談を活用し、児童と教師の対話を通して信頼関係を高める。 スクールカウンセラーを積極的に活用する。5年生全員の面接を行う。	月1回の都巡回相談では、特別支援教室に入室している児童を中心に見取りを行っていただき、かわり方、支援の仕方について助言を受け、夕会や校内委員会において教職員で共有した。また、スクールカウンセラーとの連携が効果的に回転し、支援体制を厚くすることができた。このことが保護者からの信頼につながり、子供たちが安心して過ごすことができる体制づくりの大きな力となった。
	食育を推進する。	望ましい食習慣を身に付ける態度を養う。	栄養士を中心に食育を推進する。 食物アレルギー対策に努める。	今年度は給食委員会との連携が進み、給食時の放送での児童の投げかけがとても有効だった。お箸名人やもったいない大作戦などでも給食委員会が集会や各教室でお話をするなど活躍し、望ましい食習慣の向上に寄与した。アレルギー対策として保護者からの申し出のあった児童だけでなく、給食等で気になる場面のあった児童の保護者に対しても相談し、安全な配慮ができています。
	防災・安全教育を推進する。	危機回避能力を育てる。	セーフティ教室や体験的活動を行い、総合防災教育を実施する。	毎月の安全指導で避難時の行動が100点であることは当たり前と指導してきた。この言葉のとおり児童は自分の命は自分で守る「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」「おかしも」を確実に身に付けている。このことに加え、学校公開でのセーフティ教室の実施が保護者・地域への啓発につながっていることが意見交換会からうかがい知ることができ、大きな収穫となった。 防災教育については、学校運営協議会の仲介のもと校区の自治会と話し合いができ、来年度は同日、同会場開催が決定した。今後さらに地域合同防災訓練につなげていきたい。

学ぶ喜び、できる喜びに学校	「できた」「わかった」の積み重ねによる児童の自信と学習満足度を向上させる。	課題解決型授業を徹底する。ねらいを明確にし、魅力ある課題提示に努める。思考の時間を設定し児童の主体性を育てる。	週の指導計画作成の際、めあて、導入、思考場面を明らかにさせる。校内研究を中心に学びに向かう力を高める指導法を探索し実践する。ICT 機器を活用して個別最適な学びを一人一人が行えるよう学年分科会を中心に授業研究を進める。	今年度は、八王子市GIGAスクール構想推進校の指定を受け、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実をすべての教員で進めることができたことが大きな成果である。また、年度初めに新しい授業スタイルへの保護者からの不安の声を受け、これまで3回授業参観と説明会を行った。回を追うごとに保護者の理解が深まり、また学校運営協議会の応援もあり、3回目の説明会の感想は否定的な意見、感想はなくなった。探索的な学習場面では、ICTを活用した情報を収集したり、自分の考えをまとめたり、友達のことを参照したりするためにオクリンプラスを有効に活用し、深い学びにつなげることができるようになってきている。
	基礎的な知識・技能を定着させる。	授業規律を確立させる。一人一人のつまずきを発見し、克服させる。	「はい、立つ、です」などの授業規律を校内で統一する。習熟度別授業、放課後補充教室でミライシードを積極的に活用する。	「はい、立つ、です」は定着してきている。しかし、児童によっては、規律に縛られることを窮屈に感じたり、不安に感じたりして、逆に落ち着かなくなってしまう状況も出てきている。一人一人の個性に応じて対応する必要はある。ミライシードの活用は定着しており、学期ごとの東京ベーシックドリル診断テストで100点を採れなかった児童が対象となる放課後補習教室では、学期末にはほぼ全員が課題を終了することができた。
	学力向上委員会の充実を図る。	学力向上委員会にて学力向上に向けた全校的な取り組みを推進する。	少人数算数担当を中心に放課後の補習、家庭との連携を通じた繰り返しの学習を計画的に実施し、学習内容を定着させる。	昨年度見直した放課後補習教室は地域のボランティアの方々には支えられており、今年度はボランティアの方がミライシードの進捗についても管理し、担任は報告を受ける形が定着した。また、子供たちの主体的な学びを促すため課題を終了した児童も自ら課題を見つけ、参加してもよい形に修正した。すると、自主的に参加する児童も見られ、気持ちよく参加できる雰囲気になった。今後も児童の主体性を重視した形で進め、検証していく。学力の状況としては、とくに6年生は東京ベーシックドリルが4月には62%の正答率だったが1月には77%と飛躍的に伸びた。
家庭・地域社会との協働による開かれた学校	開かれた学校から開かれた教育課程を目指す。	児童・職員・地域との交流を推進する。保護者、地域と協働し学校の環境整備を行い、安全できれいな学校を目指す。各種ボランティアとの連携を図る。	学校運営協議会を中心に教育活動へのボランティア派遣の体制をつくり上げる。校舎周辺の清掃、校舎裏及び外周の草刈りを協力して行う。HPやメール配信等で保護者・地域に対しての情報発信を充実させる。防災訓練を地域と同日・同場所で開催し、連帯感を高める。	学校運営協議会と連携できることを模索するため、第1回の会議で全教員と協議員とで学年分科会ごとの話し合いの機会をもち、その中で具体的な支援案を出し合った。そこでの内容をその場限りにせず、1年間の議題として検討を続けた結果、助産師さんによる命の授業や車いす体験、けん玉世界チャンピオンによる特別授業、保護者のつながりを深める茶話会の開催など多く実現することができた。令和の日本型学校教育への不安や心配の声が7月に保護者数名から上がった。このことを学運協で報告し、後押しを約束いただいた。このことを受け、保護者への説明の機会を3回設けたことで、理解が深まった。北野台自治会との合同防災訓練を模索してきた結果、来年度令和7年1月28日の開催が決定した。
特別支援教育の充実	全員が安心できる関係を構築する。特性について理解し、かかわり方を学ぶ。	校内委員会を充実させ、関係者会議を開催する。学校サポーターの積極的な活用を図る。特性への理解を深める授業を実施する。	校内委員会を月1～2回開催する。特別支援教育コーディネーターを中心に担任の校内支援体制を構築する。自他理解授業を全学級で行い、誰もが安心して過ごせる環境づくりを推進する。	特別支援教育コーディネーターを中心に全校児童一人一人の状況を把握し、気になる児童について校内委員会で対策を立て、夕会で教職員に共有し、サポーターを適切に配置することで、児童は安心・安全に学校生活を送ることができた。また、特別支援教室教員に通常学級全クラスで自他理解教育の授業を実施させ、全校児童の人権意識向上に寄与させた。このことが教員の合理的配慮の理解と通常学級へのインクルーシブが前進した。

自主、自立の精神に満ちた児童の育成	学級の中で児童一人一人が役割をもち、自尊感情が高まるようにする。	学習面、生活面で一人一人の児童に理解・納得のもとで活動させる。目標をもたせ、達成に向け励まし、よさを認め、自己肯定感を高める。	授業時間のみならず、休み時間、給食、清掃、放課後などに児童と触れ合う時間を大事にし、ありのままの姿を認める。子供の小さな変化に気づき、向上心のもてる指導をしていく。	児童アンケート「学校は自分の大切さ、友達の大切さを認め行動できるように取り組んでいる」の質問に対して6月89%から11月90%と高く評価されている。これは次の理由からと考える。教員の多くが毎日休み時間に校庭で児童と一緒に遊んでいる。遊びを通して教室では見えない児童の姿や友達関係が見え、児童理解を深めている。また、すべての教職員がアンガーマネジメントできており、トラブルが発生した際も諭しながら本音を引き出し、納得させ、解決させている。このことにより児童は自己肯定感を高め、自らを大切に、他人も大切にする心が育ってきている。
	特別活動を充実させ、児童一人一人が主体的に判断し活動できるようにする。	学級活動、児童会活動、学校行事などを通し、人に役立つ喜びを味わわせ、自己有用感を高める。 宿泊体験活動の充実を図る。	学級での係活動や、委員会活動などで児童の行動を具体的に励まし、がんばりを評価していく。活動の中での経験を通し判断基準を教えていく。 宿泊を伴う活動を通し、児童相互・児童と教員の信頼関係をより深める。	児童アンケート「行事や学習を通して楽しく学ぶことができています」の質問に対し6月92%、11月90%と肯定的回答が多い。学級活動や委員会、クラブ活動では児童の主体性を引き出した活動計画が立てられ、その計画のもと児童が工夫して楽しんでいる場面を多く見かける。このことは移動教室や音楽会でも大きく生かされ、自ら考え主体的に取り組むことで児童同士の信頼関係が高まっている、とともに学ぶことの楽しさを実感している大きな要因と考える。
特色ある教育活動	小中一貫教育を推進する。	高嶺小学校、中山小学校、中山中学校との小中一貫教育を推進する。9年間を見通した連続性のある指導を行う。	小・中学校の教員が、相互授業参観と意見交換会を学期に1回行い、指導法を共有し、指導計画を見直す。9年間を見通した指導計画作成を進める。小・中学校合同で同じ期間にあいさつ運動を実施する。	年3回の小中一貫教育の取組として各校の授業参観と教員同士の意見交流を行った。事前打ち合わせとして3校の管理職で集い、目指す児童像、指導目標、手立てを確認し学習指導や生活指導についての的を絞って話し合えるよう検討を進め、一貫教育の日には思考・表現について具体的な手立てを検討することができた。また、リトルティーチャーとして高嶺小の卒業生である中山中の3年生21名が半日全学年の各学級に入り、担任の手伝いをした。この取組で母校愛が深まるとともに小学生が中学生へのあこがれをもつことにつながった。各学期の最初の1週間に中山中学校区各校であいさつ運動を実施することができた。
	異学年交流を推進する。	異学年交流を行い、学年の違う児童同士が助け合い、協力し合い相手を思いやる心を育てる。	くすの木遊び、くすの木タイム、くすの木給食、くすの木まつりを行う。	今年度は制限なく本校の特色である異学年交流を年間を通して実施することができた。6年生をはじめ高学年が大いにリーダーシップを発揮し、活躍する場面を設定できた。このことにより上学年が下学年を大切にするとともに、下学年に対し上学年へあこがれをもたせることができた。働き方改革を推進する観点から授業時数を減らしており、時数の確保が難しくなっているが、より現実に沿った時数や活動にしていける必要がある。異学年交流による児童の成長は計り知れないと考えている。